

平成六年四月二十四日 (日) 郷土研究会資料

第二〇九回 史跡めぐり
城下町古河市西部の史跡を訪ねる

越谷市郷土研究会

第二〇九回 史跡めぐり案内

日時 平成六年四月二四日(日)

集合 越谷駅東口前 午前九時

(九時二一分発・准急新栃木行乗車)

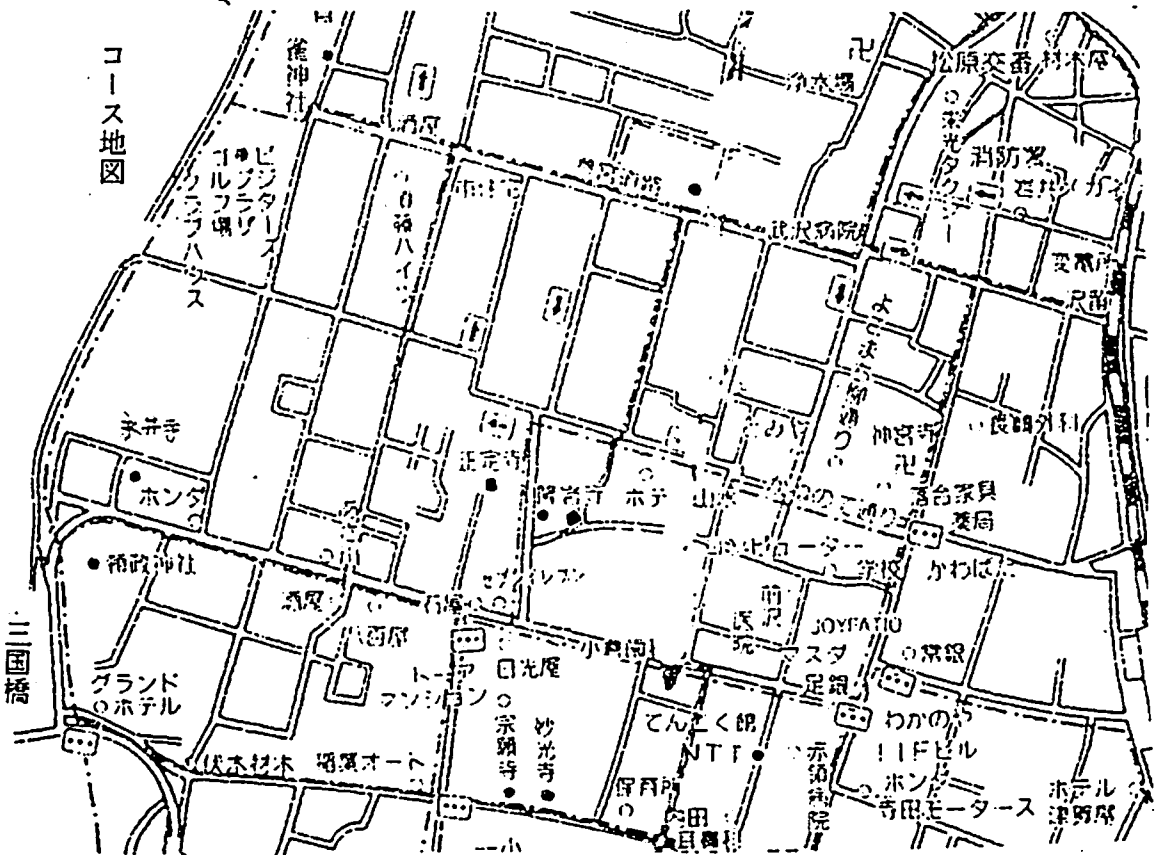
行先 茨城県古河市西部

コース 越谷駅↓新古河駅↘三国橋↘宗願寺・妙光寺↘正定寺↘福寿稲荷↘隆岩寺↘徳星寺↘雀神社(昼食)↘永井寺↘頼政神社↘渡良瀬川治水紀功碑↘三国橋↘鷲神社↘新古河駅↓越谷駅

参加費 一、五〇〇円 (交通費、その他)

案内者 鈴木秀俊

主催 越谷市郷土研究会



古河は、埼玉・栃木・群馬に県境を接する茨城県最西端の市である。また関東平野の中央に位置し、江戸時代には譜代大名の城下町、日光街道や渡良瀬川の舟運で繁盛した関東の重鎮であった。

古河城跡

渡良瀬川と思川の遊水池をはじめとした沼沢地に囲まれた古河城は、鎌倉時代初期に、源頼朝の家臣下河辺行平が館を築いて居住したのが起源といわれている。

康正元年（一四五五）將軍足利義政のとき、鎌倉に派せられていた足利成氏が、その執事の上杉氏と争って將軍家から疎んぜられ、今川範忠に追われてこの城に拠った。それ以来、関東は争乱の地となったが、古河に拠る成氏の下には、野田・関宿・小山・宇都宮・結城の各氏が続々と馳せより、互いに呼応して上杉氏に抗した。

これ以後、成氏は一躍関東の雄になって古河公方を称し、現在のまちの礎をつくって大いに威を振るったが、天正十一年（一五八三）義氏に後嗣がなく、名門として関東に覇を唱えた公方家は断絶し、一門すべて北条氏の支配下に入った。

戦国の争乱を経て、秀吉の天下統一の後を継いだ徳川幕府は、古河の軍事的な重要性を認識して小笠原秀政を封じたのを手始めに、十指にあまる譜代大名を次々と入城転封させたが、結局宝暦十二年（一七六二）肥前唐津から土井大炊守利里が封ぜられておさまり、この土井氏が領主として明治維新まで続くことになった。

日光社参のおり徳川將軍家も宿泊したという古河城も、明治六年（一八七三）ごろに取り壊された。その後もまだ古城の面影は残っていたというが、大正時代に行われた渡良瀬川の改修工事によって、まったく姿を消してしまっ

示願寺

足立山野田院と号する浄土真宗の寺で、建暦二年（一一二二）、親鸞聖人の法弟西念坊の開基と伝える。真宗二四輩の七番寺とされている。

西念法師は、信州高井郡井上城主井上五郎盛長の子で、俗名を三郎貞親といった。越後へ流罪中の親鸞に会い、その教化を受けて弟子となり、聖人と共に東国へ下った。聖人が京都へ帰ってからも西念は関東に留まり、布教を続けて一〇八歳で示寂したという。

寺は初め武州足立郡野田（現浦和市野田）にあり、武州道場とも称されたが、康永元年（一三四二）現寺地に移り、今に法灯を継いでいる。

本尊は伝恵心僧都作の木造阿弥陀如来立像。具指定文化財の木造親鸞聖人像は親鸞自作と伝えられ、関東三体の一であり、当寺は「古河御坊」と称され、日本十三御坊の一である。



▶ 西念法師之塔(清浄寺)

参考 上の写真は埼玉県吉川町木売の、浄土真宗楠井山清浄寺境内にある「西念法師之塔」で埼玉県指定史跡記念物である。塔は鎌倉時代の作風を残し、六角の碑身に笠をのせている。また、清浄寺には「おむくが池」や「楠の井戸」など親鸞聖人にまつわる話が伝えられている。

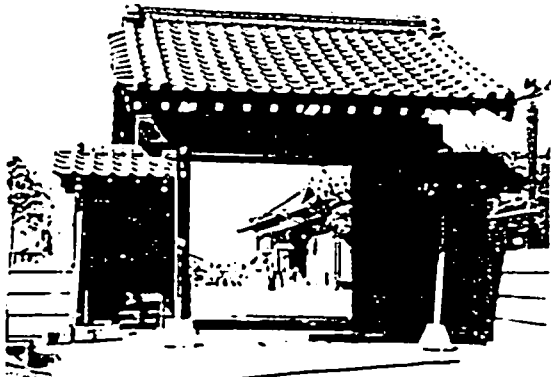
妙行寺

法興山と号し、日蓮宗、本尊は釈迦多宝如来。

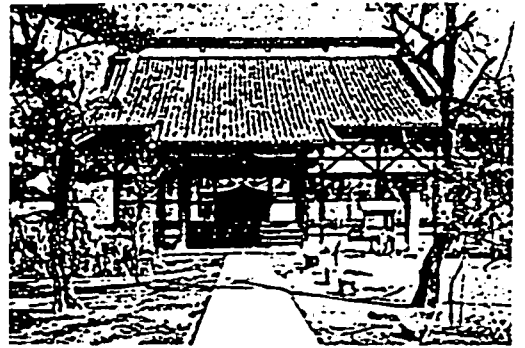
開山は初代日胤ではなく、二世日敏で、室町時代には古河公方の帰依を受けたが、公方没落後一時衰微し、三代將軍徳川家光のとき朱印地三〇石を受けた。下総中山法華経寺の末寺頭であった。

正定寺

利勝山と号する浄土宗の寺、寛永十年（一六三三）、古河藩十六万石に封ぜられた土井利勝の創建、当替玄哲和尚の開山と伝える。



正定寺黒門（旧土井家江戸下屋敷表門）



土井家歴代の菩提寺正定寺

利勝は天正元年（一五七三）三河刈屋城主水野信元の子として生まれ、のち土井利昌の養子となった。幼時から徳川家康に近侍し、二代將軍秀忠に仕えて老中となり、三代將軍家光には江戸幕府初代の大老としてその補佐役を勤めた傑物である。

土井氏は利益の代の天和元年（一六八一）鳥羽に移るが、宝曆十二年（一七六二）利里が再び古河城主となり、明治維新に及んだ。寺はその歴代の菩提所で土井一族の墓が現存している。

寺宝として絹本着色土井利勝肖像画（県指定文化財）、利勝が拝領した家康の猿毛の槍の鞘、利勝の海老胴具足・軍扇・真筆などが所蔵されている。

黒門は、土井家の江戸下屋敷の表門を昭和八年に移築したもの、江戸時代に建てられた本格的な武家屋敷門である。

また境内には、春日局が家光から拝領した開運弁財天がある。これは、堀田正俊が母の春日局の供養のため、寺に奉納したもので、開運、厄除けに靈驗ありとして近隣の信仰を集めている。なお堀田氏は天和元年から貞享二年まで古河城にあり、十萬石を領していた。

恒福寺 稻荷神社

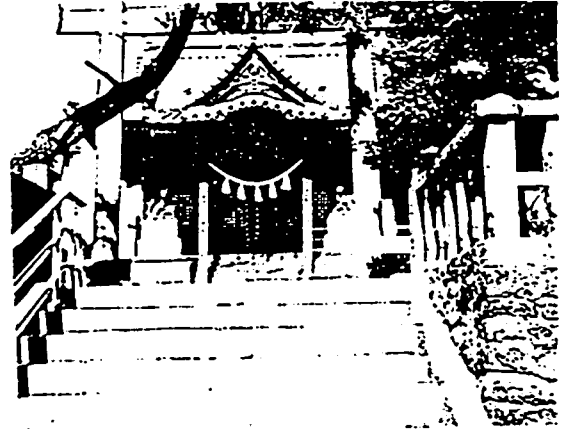
祭神は豊宇氣毘売命

元龜・天正の頃、創建と伝えられる。天正十八年、徳川家康関東入国後、初代の古河城主小笠原定政の祈願所とされる。

現在は家内安全・商売繁盛の神として参詣者が絶えない。



雀神社



福寿稲荷神社

隆山石寺

浄土宗、本尊は阿弥陀如来を祀る。

文祿四年（一五九五）徳川家康の家臣小笠原兵部太夫秀政が岡崎三郎信康の菩提を弔うため創建された。開山は広誉笈道上人。

※岡崎三郎信康は家康の長子、織田信長から武田勝頼に通じているとの嫌疑をかけられ、天正七年（一五七九）遠州二俣城で自害した。

子育て吞龍尊―明治三六年当寺の靈識上人が勧請、太田の吞龍様の分身所。

徳心日生土寺

龍見山舎那院極楽坊と号し、真言宗豊山派、本尊は阿弥陀如来。徳星寺開基略記によれば、建治元年（一二七五）後宇多天皇に仕えた徳星丸の発願により、勅命を受けて下向した良賢が立崎の源頼政の墓所に開創。徳星丸は頼政の臣猪早太（下河辺氏）の曾孫で、のち剃髪して第六代満海と称した。天正十八年、豊臣秀吉の命による足利氏姫の古河城から鴻巣御所への移住に伴い、鴻巣へ移ったが、寛文二年（一六六二）現在地に移った。

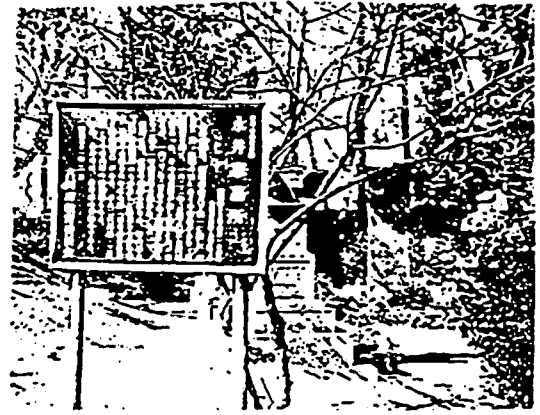
少雀神社

渡良瀬川東岸の櫛・椎の森に囲まれて鎮座。昭和二八年の堤防増補工事によって境内を削減され、社殿も東へ五〇メートル移動している。旧郷社で祭神は大己貴命・少彦名命・事代主命。創祀の年代は明らかでない。近世の朱印地は十五石であった。

現社殿は棟札によれば、慶長十年（一六〇五）古河城主松平（戸田）康長の造営。「古河志」によると、かつては古河公方足利晴氏の室芳春院が弘治



頼政神社



永井寺永井家墓所

二年（一五五六）に寄進した鰯口、松平康長息女が寄進した釣灯籠があった。参道入り口には、市指定天然記念物「夫婦ケヤキ」がある。

永井寺

曹洞宗。龍谿山と号す。本尊は釈迦如来を祀る。

永井直勝の建立。直勝は長久手、関ヶ原に戦功あり、笠間城主を経て元和八年（一六二二）古河城主となった。その後、直勝没し尚政のとき、寛永十年（一六三三）山城淀城に移る。

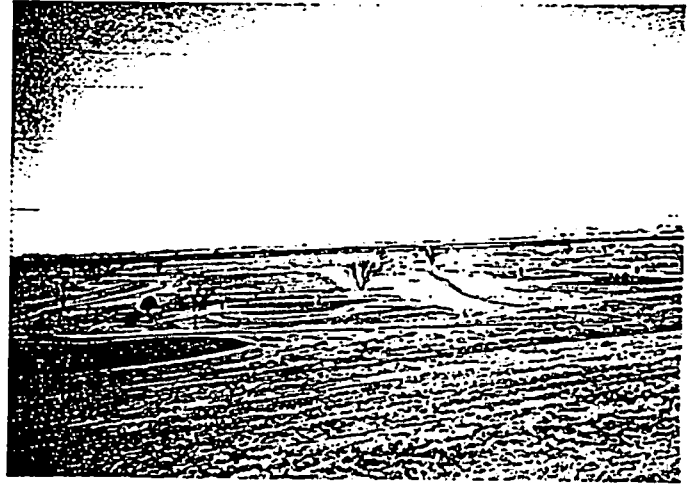
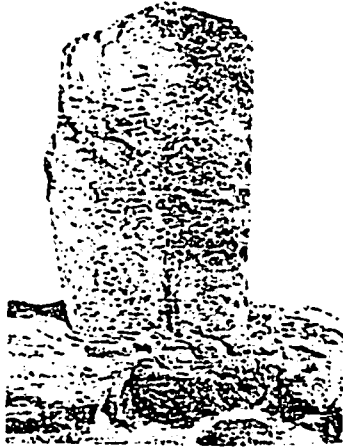
永井家墓所には直勝の墳をはじめ、市内最大の宝篋印塔と直勝を讃えた碑（林道春の撰文がある）、また二代尚政、三代尚征の供養塔がある。

頼政神社

渡良瀬川の東岸、古河城跡の土塁上に鎮座する。祭神は源三位頼政・従者猪早太・渡辺競。旧村社。もとは古河城立崎郭（頼政郭）内、頼政の首塚と伝わる古墳上に所在したが、河川改修工事のため現在地に移った。移転の際社殿床下の石郭から高さ一尺五寸の朝鮮青磁の甕に納めた遺骨が出土したという。

由来は「永享記」に「城南東方に竜崎と言うところに、源三位頼政の廟あり、（一説に伊豆守仲綱）その由来を尋ねるに、三位入道平等院に於いて自害の後、郎党下河辺三郎行吉という人、この地の住人なりけるが、頼政の首を討ちて、衰老の首を獄門にさらされん事を、無念なりとのたまいしとて、遺言違わず山伏の姿をなし、かの首を桶に入れ笈裡に納めて諸国修行して、

古河雀社裏の堤防上の万葉の碑



渡良瀬遊水地

後本国に帰る。ここに笈を置けるに、此の笈少しも動かず大石のごとく、是は不思議なり、此の地に任せ給うべき験にやとて、此の館の鎮守に祝い奉る」とある。

現社殿は頼政の後裔と称する松平（大河内）信輝が古河城主時代の造営。また、隣接して水神宮が鎮座している。

◎渡良瀬川治水紀功碑 佐藤洋之助像

渡良瀬遊水地

渡良瀬遊水地は茨城県古河市の北西に位置し、栃木・群馬・埼玉・茨城の四県の県境にまたがる面積三三万平方キロ、総貯水量二億立方メートルの遊水地である。

明治四三年から大正十一年にかけての渡良瀬川の改修工事により遊水地内用地の買収を行い、藤岡町の台地を開削して渡良瀬川を地内の赤麻沼に落水し、思川・巴波川の流末を整理し、さらに古河より利根川に至る河道の開削築堤を行って形成されたものである。

しかしその後、昭和十年、十五年、二二年と大出水があり、これらをもとに立てられた新しい改修計画で、遊水地を調節池化して三つの調節池を作り、従来よりも洪水調節機能を増大させるものとした。

さらに第一調節池の南側約四・五平方キロを掘削した渡良瀬貯水池は、総貯水量二六四〇万立方メートルで洪水調節、都市用水の供給、既得用水及び河川維持用水の補給を行う目的を持っています。



万葉古河の渡

埼玉県北川辺町は周りを利根川と渡良瀬川で囲まれていて、昔から水害の多いところであった。今では町の周りを堤防ですっかり囲み、排水機場を設けて雨水を排除している。洪水の恐れは少なくなっている。廃村になった旧谷中村は、今では渡良瀬遊水池として流域の人々を水害から守ってくれているが、犠牲になった人々に感謝の念を忘れることがあってはならない。

万葉の時代に

まくらがの古河の渡りのから梶の

音高しもな寝なへ兒ゆへに

とうたわれた渡し場は、一体どの辺りにあったのか、一面の菅原となっていて、現在では見当もつかない。埼玉、栃木、茨城の三県の境であることから名付けられた渡良瀬川に架かる三国橋の、北川辺側のたもとにある鷲神社の境内に埼玉県指定の「史蹟万葉古河の渡」の碑が建っていて、それが僅かに万葉の昔を偲ばせている。

万葉の頃、利根流域は芦の生い茂る水郷で、今の渡良瀬川と利根川の合する辺りは「まくらが（麻久良我）」と呼ばれていた。当時詠まれた和歌が万葉集に載っている。

先の一首の外に次ぎの二首がある。

逢はずして行かば惜しけむまくらがの

許我（古河）こぐ船に君も逢はぬかも

白たへの衣の袖をまくらがよ

海人（あま）漕ぎ来見ゆ波立つなゆめ

参考文献

茨城県の地名（日本歴史地名大系8）平凡社

観光と旅（郷土資料事典・茨城県）

人文社

3 近世の古河（1）

- | | |
|-------|---|
| 1590年 | 徳川家康の臣、小笠原秀政（3万石）信濃松本から入る。在城10年5ヶ月信濃飯田へ移る。隆岩寺、正騎寺を建立。 |
| 1601年 | 松平康長（2万石）上野白井から入る。在城9年余にて常陸笠間へ移る。雀神社現社殿造営。 |
| 1612年 | 小笠原信之（2万石）武蔵本庄から入り、政信が継ぎ在城7年余にて下総関宿に移る。
最初の日光社参、将軍秀忠の古河宿城接待。 |
| 1619年 | 奥平忠昌（11万石）下野宇都宮から入り、在城2年10ヶ月で再び宇都宮へ移る。
城下町古河の大改造。 |
| 1622年 | 永井直勝（7.2万石）笠間から入り、在城10.3ヶ月二代尚政のとき山城淀へ移る。
日光街道の整備、キリシタン弾圧、永井寺の建立。 |
| 1633年 | 土井利勝（16万石余）下総佐倉から入り、利隆、利重、利久、利益と継ぎ、在城47年10ヶ月志摩鳥羽へ移る。
城下町の拡張と整備（原町の開発、八幡町八幡宮、諏訪八幡宮、徳星寺の移転）、古河城三階櫓造立、正定寺の建立。 |
| 1681年 | 堀田正俊（9万石）上野安中から入り、正伸が継ぎ在城4年4ヶ月出羽山形へ移る。 |
| 1685年 | 松平信之（9万石）大和郡山から入り、忠之が継ぎ在城8年5ヶ月。忠之乱心のため断絶。
坂間に松平藤井紀功碑を建てる。
熊沢番山古河に移され城内に禁固となる。 |
| 1694年 | 松平信輝（7万石）武蔵川越から入り、信祝が継ぎ在城18年6ヶ月三河吉田へ移る。
頼政神社の現社殿造営。 |